

# 研究報告

## 当館蔵東洋考古美術コレクションについて

### はじめに

実践女子大学香雪記念資料館（以下、当館）は、平成11年（1999）5月に東京都日野市大坂上の日野校地内に設置された<sup>1</sup>。当館における資料の収集方針は、特に近世・近代に活躍した女性画家作品を中心にしており、様々な立場の女性の制作活動や表現者としての生涯に注目して調査研究を重ね、女性画家に焦点を当てた展覧会を例年開催している。当館のように女性画家作品を集中的に収集する館は全国的にも珍しく、また本学学祖・下田歌子（1854-1936）に関する貴重な資料を中心とした常設展示を公開するなど、積極的な活動を行なっている。平成26年（2014）4月に大学が二校地化されることを機に当館も渋谷キャンパス内に移転し、それからまもなく10年目を迎えようとしている。

本学は平成31年（2019）に創立120周年を迎え、当館もまた活動を始めてより20年を迎えた。まさに節目であるその年に、当館で「再見！東洋美術—館蔵品と東京藝術大学所蔵の中国石仏による—」展を開催した。女性画家作品を中心に資料を収集する当館が、どのようにして「東洋美術」や「石仏」といったワードと結びつくのか、疑問に思われる向きもあるかもしれないが、当館の設立に関わる歴史を遡ると、そこには現在当館が集中的に収集する女性画家作品とは別に所蔵する、東洋考古美術コレクションの存在が大いに関係しており、それらの収集の歴史が当館の成り立ちに結びつくことが分かってくる。この展覧会で注目すべき出品作品は、東京藝術大学より借用した石仏3点<sup>2</sup>であったが、それだけでなく東洋美術に関する館蔵品を中心に展示をしたことも当館として特筆すべきことであった。

本稿は、当館所蔵東洋考古美術コレクションの中から、特に先述の「再見！東洋美術」展で展示した作品を中心に紹介することに加え、かつて本学に存在した「博物館学美術資料展示室」、「日本・東洋美術展示室」といった当時の施設の成り立ちを紹介することで、当館設置に至る歴史をいま一度振り返るものである。当館蔵東洋考古美術コレクションについて紹介された文献は多くはないため、同コレクションを展示した過去の展覧会活動の紹介も含め、当館のあゆみの一部をここに記して留めることが主たる目的である。なお「東洋考古美術コレクション」という呼称は、本稿で取り上げる館蔵品の中で、当館設置前に本学が購入し収蔵された中国文物や仏教美術を中心とした作品群の総称である。その他の寄贈品などについては本稿で取り上げる対象ではないことをお断りしておきたい。

### 1. 本学における博物館学課程設置と教材としての資料収集

当館の設置・設立と東洋考古美術コレクションの収集の歴史を紐解くには、本学における博物館学課程創設が鍵となる。学芸員資格を取得するための博物館学課程（旧・博物館学講座）が本学で初めて開講されたのは昭和42年（1967）で、その発展に大きく関わった方々のひとりに、故松原三郎名誉教授（1918-99）の存在がある。

松原名誉教授は昭和45年（1970）に本学に着任し、昭和50年（1975）に博物館学課程の主任となった。中国仏教彫刻史研究の第一人者として様々な功績を残した氏が美術史学における教育・研究で重要視したのは、美術作品に接すること、すなわち「実証的な研究」<sup>3</sup>であった。学内で博物館学課程の受講者が増え、資格取得に必須かつ最重要といえる博物館実習を行なうための施設を設ける目的で、昭和55年（1980）10月に当時の渋谷校舎に「博物館学美術資料展示室」が完成した<sup>4</sup>。同時にこれが契機となり美術作品の購入が始められた。松原名誉教授が「そもそも美術史の研究は…その出発点となるのは作品そのものである。」<sup>5</sup>、「…美術品の研究に最も重要なのは常に実物に接することである…」<sup>6</sup>と述べていることから分かるように、コレクションの収集にあたっては特に学生の教育に資することを念頭においていたのだろうと理解できる。そのような方針が意識されながら松原名誉教授が課程主任として資料選定の主幹を担ったことで、自ずと中国文物中心のコレクションが形成されたと想像される。松原名誉教授が退職する昭和63年（1988）までに購入された資料が現在の東洋考古美術コレクションの核となっており、その後の資料収集は平成5年（1993）まで博物館学課程（美学美術史学科）によって続けられた<sup>7</sup>。

昭和60年(1985)に大学校地が渋谷から日野に全面移転すると「博物館学美術資料展示室」も同時に移転することとなり、「日本・東洋美術展示室」と改められ、博物館学課程の学内実習用の部屋として利用されたという。さらに同じ年に美学美術史学科が新設され、展示室も学科に引き継がれることとなった。

本学の創立100周年記念事業計画にあわせ、「日本・東洋美術展示室」をさらに発展させた博物館相当施設の設置が検討された後、平成10年(1998)には学園に施設整備が了承された。翌年の平成11年5月19日、晴れて100周年記念新建造物・香雪記念館1階に当館が設置された。本学の博物館学課程の発展と美学美術史学科創設に深く関わり、大きく貢献された松原名誉教授が亡くなられたのは同年5月4日のことで、当館の開設とほぼ同じ時期であったことは、課程創設から当館設置に至る歴史と発展、そして新たな始まりを物語るように、まさにバトンを託されたかのようにも感じられる。その後平成14年(2002)7月31日に「香雪記念資料館規定等」が制定され、この日が当館の設立日となった<sup>8</sup>。東洋考古美術コレクションは平成16年(2004)に博物館学課程から当館に引き継がれることとなり、現在も所蔵を継続する。コレクション件数は約100件にのぼる。さらに同年9月には、当館の設置より始まった多様な展示・教育普及活動などの実績が認められ、東京都から博物館相当施設の認可を受けた。

## 2. 東洋考古美術コレクションの展示歴

かつて松原名誉教授が中心となって選定されたコレクションは、当館の展示においてはどのような役割を果たしてきたのか。ここでコレクションの展示歴を紹介したい。渋谷校地時代の「博物館学美術資料展示室」、あるいは日野校地時代の「日本・東洋美術展示室」でどの作品がいつ頃展示されていたかは現在詳細を知ることが難しいが、残された記録写真によって窺い知ることが可能である(挿図1・2)。当館設置以降に東洋考古美術コレクションの一部を中心に展示した最初の展覧会は、当館が日野校地に設置された次年度末開催の「仏教美術展—日本・東洋美術展示室所蔵の作品・複製・拓本による—」(会期:平成13年[2001]1.22-1.26)である。当時は未だコレクションの所蔵は「日本・東洋美術展示室」であった。主に仏教美術関係の資料をメインに出品し、広く一般公開された<sup>9</sup>(挿図3)。短い会期ではあったものの、学内中心の入館者数が記録された。実作品としてガンダーラ出土《如来像頭部》などを中心に6点、拓本資料として法隆寺金堂釈迦三尊像の光背裏面陰刻銘などを中心に7点、ほか仏像、仏画の複製・模写を7点ほど展示し、実物のスケールを実感できる資料を中心に展観された。さらに本学図書館の協力により、図書館蔵《明珍恒男氏作成仏像彫刻資料》を併せて展示し、仏像修理の報告書に関わる貴重な資料が展示されたこともたいへん意義深い。

当館でコレクションを展示する機会として継続的に開催している展覧会は「中国美術史入門展」が挙げられる。こちらは現在は年2回、前期と後期にわたって行なう展示で、著名な中国絵画を複製によって紹介する展覧会である(挿図4)。複製の所蔵と展覧会の主催は本学美学美術史学科・博物館学課程で、当館は協力という形で展示作業などをサポートする<sup>10</sup>。展覧会名は「中国美術史入門展」や「中国美術 初めの一步」というように、本学の学生を含めより多くの人たちにむけて中国美術との出会いを促し、親しんでもらうことが展覧会の主旨であり、学内外を問わず好評をいただいている。現在の国内において、中国美術のうちのとりわけ絵画作品については現物を鑑賞できる場は限りなく少ないが、当館では二玄社製の精緻な原寸大複製を展示するため、作品のスケールを実感するに相応しい内容となっている。この展覧会ではほぼ毎回、複製作品のテーマに併せて東洋考古美術コレクションの一部を共に展示しており、複製と実作品を同時に展示することで鑑賞者の理解を深めるねらいを多分に含んでいる<sup>11</sup>。

最後に紹介するのは「はじめに」で触れた「再見!東洋美術—館藏品と東京藝術大学所蔵の中国石仏による—」展(会期:令和元年[2019]7.1-8.4)である。この展覧会は先述のとおり当館設置より20年を記念した展示であったと同時に、没後20年となる松原名誉教授を顕彰する機会として、中国文物と仏教美術を中心とした展示でもあった(挿図5)。北インドから中央アジアを経て日本に至る仏教東漸の歴史を辿る内容でもあり、このような壮大なテーマについて館藏品を活用して展示が成立することは、大学博物館における教育活動の一面という意味では恵まれた環境であるともいえる。東京藝術大学のご協力により、松原名誉教授の研究に因んで中国の石仏を借用した。仏像彫刻を他機関より借用して展示をする例が当館では初めてであったこともたいへん意義深いことであった。展示資料総数23件のうち3件は借用の石仏で、他は基本的にすべて当館のコレクションから選定されたが、松原名誉教授が生前に調査で用いた自筆ノートや貴重な調査の様子を写した写真など、通称「松原資料」(本学美学美術史学科蔵)と呼ばれる資料も併せて展示した。生前の松原名

譽教授を知る方々や仏教美術研究に携わる方々にとっては感慨深く思われる展示でもあっただろう。展示品は先述の平成12年度開催「仏教美術展」出品資料と一部共通し、さらに漢～唐代の代表的コレクションを網羅的に展示したことは当館で初の試みであった。さらに「再見！東洋美術」展に関して特筆すべきは、展覧会の開催に合わせて他機関が所蔵する東洋考古美術資料の調査の機会を得て、所蔵品についての新たな知見を得られたという点である。個別の作品情報などについては次項で紹介する。

### 3. 資料紹介

「日本・東洋美術展示室」から引き継いだコレクションは約100件にのぼるが、ここでは令和元(2019)年度「再見！東洋美術」展に出品された仏教美術作品と中国の考古美術作品を中心に、本稿執筆者が注目したい資料や、他機関蔵の作品などと比べて共通項が見出せる作品について取り上げたい。なお、当館蔵品で資料名が重複する一部の作品については便宜的に「その①」などと示すこととする。

仏教美術関連資料については、仏陀の姿を表わす仏像彫刻の誕生として有名なガンダーラ仏の優品をはじめとして、日本への仏教伝来とその後の展開を窺い知ることのできる拓本資料などを紹介したい。中国の考古美術作品については、主に陶俑と画像磚を取り上げる。

#### 仏教美術—仏像彫刻—

《如来像頭部》その①(挿図6)は、ガンダーラ地方(現在のパキスタン北西部)で出土した、仏陀の姿を表わした彫像の頭部である。高18.9cm、片岩製。いわゆるガンダーラ仏と呼ばれる一連作例の特徴がよく表われた作品で、髪をウェーブ状に表わす点や西方的な風貌などを持ち合わせる。背部に光背の一部を残す他、欠失する箇所が複数みられるが、目・鼻・口といった細部の造形は十分に見て取ることができる。特に写実的な唇の表現などは特徴的で、脛が厚く、森厳な顔貌には豊かな造形感覚がみられる。髪の毛の形状に注目すると、太さの異なる髪を幾筋も表わして前方から後方に向かって流れるように表現している。同時期の作例ではウェーブ状の髪をふくらませた肉髻部の下に細い紐を表わす像もあるが、本品ではその表現はみられない。眉と上脛のあいだや額から鼻筋にかけては割合なだらかな表現の造形もみられ、その穏やかで洗練された表現から、制作時期はインド・クシャーナ朝の3～4世紀頃と考えられる。本品は東洋考古美術コレクションの収集の比較的初期に購入された作品で、本学博物館学課程の機関誌『MUSEOLOGY』創刊号(昭和57年〔1982〕4月刊)の表紙を飾った。東洋考古美術コレクションの象徴的な作品である。

次にハッダ出土の3点の作品を取り上げよう。ハッダとは現在でいうアフガニスタン東部の一大仏教寺院址群のことで、かつてストゥーパや祠堂を中心にした仏教寺院が存在した。それらの寺院装飾の一部として造られたのが、石造やストゥッコ製の仏像であった。地理的關係からこれらもガンダーラ仏の一種といえる。ハッダではストゥッコ製の仏像が大量に出土し、やがてその多くが海外に流出して世界中に広まり、本学の所蔵品もその一例を購入したものである。ストゥッコとは訳すと化粧漆喰のことで、消石灰を主原料として粘土粉、大理石粉、砂、顔料などを混ぜ、建築の内装や装飾の材料として用いられた。加工がしやすいので捻塑的で細かい造形に適しており、より親しみやすい表現が可能な素材ともいえる。

《如来像頭部》その②(挿図7)と《如来像頭部》その③(挿図8)はいずれも螺髪を凹状の円形に表わし、髪際線を額の中央で屈曲させる表現が共通し、目の輪郭線や口元に彩色の一部が残る。その②高11.4cm、その③高9.4cm。その②は上脛が厚く伏し目で、鼻が大ぶりであるのに対し、その③は眼の見開きが強調されて張りのある面貌を表わしており、両者で作風が異なる。どちらも目鼻立ちがはっきりと表われているが、その②は先述の《如来像頭部》その①のような石造彫刻的表現により近く、その③はより捻塑的な新しい造形感覚に近いものといえようか。同じハッダ出土の資料でも様式が一樣ではないことが理解されよう。制作年代はその②が若干早いものかと思われるが、いずれも3～5世紀頃と考えられる。《菩薩像頭部》(挿図9)は高9.5cmで、供養者像頭部の可能性もあるが定かでない。髪の一つ一つを粒状に表わし、その内側を少し刮ってカール状を表わす。髻部の宝珠形の飾りはいくつか欠失するが、大ぶりの飾りを表わしていたことが見て取れ、本来の華やかな姿形が想像される。制作年代は3～5世紀頃と考えられ、静逸な表情からは《如来像頭部》その②と近い造形感覚があるかとも思われる。これらはかつて寺院を彩った仏像彫刻の壮麗な様相を垣間見ることができる貴重な作品群である。なおストゥッコ製の仏像は、多くは型づくりによる大量生産に向けた制作方法が用いられたと考えられるが、各像の細部の表現にちがいがみられることは留意すべき

で<sup>12</sup>、篋などによる仕上げの表現からは当時の技術水準の高さを改めて看取できる。

中国の仏像彫刻の作例としては《菩薩像頭部》(挿図10)を取り上げる。本品は白玉すなわち白大理石製で、高8.9cm。白玉を用いた仏像彫刻は、早い例で北魏時代に作例があり、唐代には特に盛んに制作されたという。河北省では白玉製の仏像が盛んに制作され、本品もまたその作風や特徴から河北省で北齊時代(550～577)に造られたと考えられる。現状頭部の上面は平滑で、頭に大きな宝冠を着け、その下に表わす頭髪を正面中央で左右に振り分ける。側面観では耳の位置をやや低めに、大ぶりに表わす。鼻は摩耗によるものか若干バランスが崩れる部分も見受けられるが、総じて優しげな気品のある顔貌表現にこの期の特徴がよく表われている。本品が当初どのような尊像形式であったかは定かでない。

### 仏教美術—拓本資料—

当館では東洋美術を研究する上で重要かつ貴重な資料の拓本を所蔵しており、その中には仏教美術に関するものが多数含まれる。例を挙げると龍門石窟古陽洞に刻まれた北魏(500年前後)に遡る造像記の拓本や、東魏(534-550)に造営が開始された天龍山石窟第3窟正壁の浮彫による比丘像の拓本などがある。拓本とは、原品そのものが何らかの理由で失われたとしても、存在した当時の状態を伝えるものとして学術的にも意義のある資料である。《東大寺大仏蓮弁線刻画(拓本)》(挿図11)は、いわゆる奈良の大仏と呼ばれる東大寺金堂廬舎那仏坐像の台座に現存する線刻画の一部を写しとったものである。拓本の画面寸法は137.8×67.3cmで、台座の当初部のうち向かって右側の請花(間弁、第24号)上部に刻出された中尊釈迦如来像とその周囲が写されている。線刻画の実物は一つの原画を基にフリーハンドで下絵を描き、それを刻出したものと考えられ、各蓮弁の図像はほぼ共通するが蓮弁ごとに精粗がある。拓本からも分かるように、釈迦仏の丸く張りのある顔、重量感を思わせるがっしりとした肩、しなやかに引き締まった腰、たっぷりとした質感をみせる衣文線などは流麗かつ明瞭な刻線で表わされる。これらの表現は初・盛唐期の仏教絵画に通じることが指摘されており、東洋美術の伝播が看取される作例である。本拓本は奈良時代における仏教美術の理解につながる重要な教材といえるだろう。

### 中国の考古美術—陶俑—

俑とは、人や動物の形を象った副葬品の一種である。古代において権力者を弔う際に、死者と共に侍者や動物を埋める殉葬という風習が存在したが、中国ではやがてその代わりとなる俑が造られるようになった。俑は、死者が死後の世界で使用するために副葬される日用品を象った、いわゆる明器と共に埋葬される。陶製の陶俑をはじめとして、木、金属など多様な素材が用いられた。中国では戦国時代以降に流行し、秦の始皇帝陵墓で出土した兵馬俑が著名な例として挙げられる。兵馬俑の写実的な人物表現は殊に特徴的であるが、漢代以降も俑は大量に制作され、時代ごとに異なる様々な表現や姿形が俑の魅力といえる。当館は制作が漢代まで遡るとみられる資料をはじめとして、人を象った陶俑を複数所蔵する<sup>13</sup>が、ここでは「再見！東洋美術」展に出品した俑を中心に取り上げる。

漢代の制作とされる立俑2点のうち《加彩女子俑》その①(挿図12)は、正面を向き、両手を腰の高さに挙げて膝を軽く曲げる姿の立俑である。高66.2cm。手の形勢はおそらく拱手ではなく、何かを捧げ持っていたかと考えられるが、現状両手首先を失うため元の形状は定かでない。頭部は髪の毛を正面中央で左右に振り分け、その中心線にあたる箇所には小さな孔が穿たれており、当初は別製の飾りを着けていたとも考えられる。側面観では頭を前方にやや傾け、膝のあたりを若干曲げて畏まる体勢であることが見て取れる。体奥が薄く、下半身のラッパ状に広がる裾の表現などは正面性の強い造形感覚で、これらの特徴は漢代の仕女俑に多くみられるものである。現状本体の表面に土が付着している部分があり詳細を明らかにすることが難しいが、着物の衿、袖口の一部などに彩色が認められる。本品のように両手を同じ高さに挙げる作例は国内の他機関の蔵品でも散見され、立俑、あるいは両膝をつく坐俑のどちらも現存する<sup>14</sup>。これらは頭部と体部を別に造り、さらに別に造った両手先を腕部に挿し込む構造である。眉、目、鼻、口の造形は抑揚が少なく、髪を頭部上方の左右に盛り上げる表現や、正面観にみられる肩から腕にかけての割合整然としたなだらかな曲線による静淑な佇まいは、MOA美術館蔵《加彩女子俑》(漢時代、高75.0cm)(挿図13)などによく似る。

もう1点の立俑《加彩女子俑》その②(挿図14)は高35.3cmでやや小ぶりである。膝を軽く曲げて拱手する仕女のような姿を表わす。《加彩女子俑》その①と比較すると、髪を後ろで束ねてその先を垂らす点や、鼻が

高く面長な点、首の部分の造形が省略されたやや寸詰まった衿元の表現といった姿形の細部にちがいがみられる。また側面観では膝を曲げて畏まる様子がより顕著に表われ、着物の裾を後方に流すような表現がみられるなど、その①とは異なる作風であることが分かる。その②はこれまで「中国美術史入門展」で度々展示されてきた作品である。

北魏（6世紀）の制作と考えられる《加彩文官俑》（挿図15）は、右手を胸前に挙げて握り、足を揃えて直立する姿の男子俑である。高23.8cm。冠を被り、大袖の衣に帯を締め、袴を着ける。握る右手には孔が貫通し、当初は別製の持物があったと考えられる。正面観では小ぶりではっきりとした姿であるが、側面観では下半身の体奥が割合深く、どっしりとした存在感のある体軀表現がみられる。抑揚の少ない穏やかな顔貌表現、腹をやや前に出す体勢、背面にみられる腰のくびれの表現などが特徴的で、漢代の俑などと比べると側面観・背面観の造形も意識されている点は、大きなちがいである。現状彩色がよく残る優品である。

《加彩武人俑》（挿図16）は、唐代・7世紀の制作かと考えられる立俑である。高34.4cm。左手を腰の高さで握り、右手を胸の中央で握り、ほぼ直立する姿である。兜鍪という、鍔と護耳と頸甲が付属した兜をかぶり、肩甲、胸甲、帯、草摺（膝裙）、袴、沓を着ける。側面観では腹を前に出し、背中をやや反らせる体勢で、特に下半身はずんぐりとした寸胴な表現が顕著である。背面観では頭を左方にやや傾け、左肩をやや後ろに引くような体勢をとる。かつて隋から唐にかけて同じような姿形の武人俑が流行したようで、類例は多い。天理大学附属天理参考館（以下、天理参考館）は本品とよく似た俑を所蔵しており、「再見！東洋美術」展の折に作品調査の機会を得た。天理参考館には当館蔵《加彩武人俑》とほぼ同高の《黄白釉加彩武人》を2体所蔵（挿図17・18）、さらにそれより約10cm高い《黄白釉加彩武人》を2体所蔵する（挿図19・20）。隋代の武人俑作例にはすでに、寸胴な体軀表現によって重量感を感じさせる造形が散見されるが、初唐期の作とされる天理参考館の作例ではそれに加えて表情や姿勢といった姿形の細部に武人としての性格やそれに伴う動勢が少しずつ表われていくような展開がみられるようである。前代の造形感覚を継承しつつも体軀の抑揚や表情豊かな表現が加味された姿が、この期の武人俑の特徴と思われる。当館蔵《加彩武人俑》は現状彩色が所々に残るが、釉薬を施さずに素焼きである点は、制作時代が若干下の要素とみなされる<sup>15</sup>。ほか、天理参考館所蔵の俑（挿図19・20）は目頭に鋭い線を刻む、いわゆる瞋目のような表現が認められるが、当館品には確認できないといった細部の相違点がある。いずれにしても当館品は隋から初唐期にかけての武人俑作例の流れの上にあることは確かと思われる。

## 中国の考古美術—画像磚—

画像磚、あるいは画像石は、古代の人々の生活の様子や思想・宗教観を窺い知ることのできる貴重な資料である。古代中国では国家的思想の儒教の精神や神仙世界を表わした画像磚・石が大量に制作され、建築物や墓室の装飾として機能した。画像磚は文様を型押しした煉瓦のことで、漢代以降に盛んに制作された。以下では当館コレクションより、興味深い図像を表わす画像磚を2点紹介する。

後漢代に遡るとみられる《画像磚》（挿図21）は寸法22.6×29.2cm、厚み4.2cmで、元は大型の磚の一部を切り取ったものと考えられる。磚の中央下段の人物は両腕を体の前で組み重ね、肩を怒らせて膝を左右に広げて立つ姿で、大きな目と鼻、歯を剥き出す顔貌などからは奇妙な印象さえ受ける。この謎の人物とほぼ同じ図像を表わす例が河南省鄭州出土の画像磚（挿図22）にあり、参考文献の解説<sup>16</sup>では『周礼』に登場する「方相氏」と呼ばれる周官とするが、『周礼』の示すその特徴とは異なることから方相氏ではないと考えられる。ただし南陽（河南省南西部）の画像石には、この人物と同じような体勢をとりながら弩弓を引く兵士の図像が多数確認でき、それらの系譜を継いだ図様である可能性が高い。人物の両脇には針葉樹とみられる樹木と、上段には獣面人が鳥に向かって矢を放とうとする場面がそれぞれ配される。画面両端には「く」の字を縦につなげた帯状の文様を表わす。これとほぼ同じ図様の画像磚（挿図23）が天理参考館に所蔵されており、こちらについても調査の機会を得た。天理参考館蔵《押型舗首守門空磚》は人物・樹木・獣面人の場面だけでなく、さらに上段に舗首と2人の門守を、下段に2匹の獣をそれぞれ表わす大型の磚として残る貴重な例である。同図様の場面に注目して比較すると、大要は共通するが、天理参考館蔵の磚の人物は袖裾をたくし上げて腕部に毛のような表現を点ずるのに対し、当館品にはその表現がみられず衣を何層も重ねるような表現がみられる。人物の上段に示された鳥と獣面人の場面は、天理参考館蔵の磚は矢を向けられた鳥が怯むようにのけぞる様子が活写されるのに対し、当館の磚は鳥の動きにやや固い描写がみられる。いずれにしても全く同じ型のス

タンブを用いていないことは確かであるが、鄭州出土画像磚などと併せて比較することで、制作時期のちがいをある程度推定することはできる。鄭州出土画像磚の人物は腕部に毛を点ずる表現を示し、天理参考館蔵の磚により近いものと考えられるが、その部分を省略あるいは写し崩れが発生したとみられる当館品は、より時代が下るものと推定されよう<sup>17</sup>。

後漢代の作と考えられるもう1点の作例《孔雀文磚》(挿図24)は、寸法9.0×21.8cm、厚み1.2cmの割合小型の磚である。口に丸い形状の宝珠のようなものをくわえ、両羽を大きく広げて羽ばたく様子の鳥が生き活きとした表現で描写される。神仙世界の動物を表わす中国古代の文物は多種多様に大量に出土しており、本品もまた鳳凰や朱雀といった瑞鳥の一種を表わしていると思われるが、現状当館では孔雀としている。両羽や足の腿の部分は肉付きを巧みに表現し、さらに伸び伸びとした躍動感のある姿に漢代の造形感覚を看取できる。

以上、概略的であるが当館蔵の代表的な東洋考古美術資料について紹介した。本稿によってコレクションのすべてを紹介することは叶わないため大要を示すのみに留まる。コレクションの中には制作時期がはっきりしないものも含まれてはいるが、それぞれを当館が推定する制作時代の資料とみなし、展示公開してきた。これらは当館の東洋美術に関する展示で中枢をなしてきた作品群であり、展示の一面を支えてきたという点でたいへん意義深い資料であることを改めて書き添える。

#### 4. 結び

大学博物館における資料の収集は、限られた予算の中で学生の教育に役立てられる資料を選定すること、さらに小品でも美術史的位置を見出すことのできる価値をもつ資料を選定することが重要である、とかつて松原名誉教授は述べていた<sup>18</sup>。東洋考古美術コレクションを見渡すと、当時の予算の都合などといった様々な事情がある中で、なるべく系統的に資料を揃えるように努めていたことは想像に難しくなく、松原名誉教授自身もその点について言及している<sup>19</sup>。氏のコレクションに対するまなごしは当館の現在の活動にも反映されており、当館設置後には中国美術史入門展を中心に東洋考古美術コレクションの一部を展示することで、鑑賞者の理解を深めることに大いに役立てられていると共に、当館が大学に附属する資料館として教育活動の一翼を担う活動の一つともなっている。

コレクションを他機関蔵の類似作品と比較するなどして研究を進めることが実現されれば、それは最も望ましいことである。本稿を執筆する上で展示歴を検めてみたところ、コレクションの一部の公開はほぼ毎年行なわれてきたことを再確認できたが、個別の調査研究に関しては十分とはいえない。とはいえ、本学の博物館学課程創設に伴って収集されたコレクションが今もなお受け継がれ、展示と教育に活用されていることはたいへん意義深いということ、さらに収集の背景や方針を知り、資料にむけられたまなごしを想像することで、その価値が再評価されることにも気づかされた。当館の東洋考古美術コレクションがこの先も展示や教育に活用されることをせつに願うと同時に、あらゆる立場の方々の視点にとまり、研究が展開されていくことを期待する。本稿がその呼び水になることができれば幸いである<sup>20</sup>。

(実践女子大学香雪記念資料館 臨時職員 [学芸補助] 河本 理緒)

#### 謝辞

令和元(2019)年度展覧会「再見!東洋美術一館蔵品と東京藝術大学所蔵の中国石仏による一」に際しては東京藝術大学より資料の調査と借用にご高配を賜りました。また当館蔵品に関わる資料調査では天理大学附属天理参考館、早稲田大学會津八一記念博物館、出光美術館のご厚意により実査の機会をいただき、多くのご教示を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

#### 附記

当館館長を務める本学美学美術史学科教授・宮崎法子先生は令和4(2022)年度をもって実践女子大学を退職されます。当館の設置から今日に至るまで、女性画家に関する研究活動と、ご専門である東アジア美術史の中でも特に中国絵画史と深く関わる当館の展覧会・中国美術史入門展の監修をご担当されました。当館前館長で本学名誉教授の仲町啓子先生と共に、当館の発展のために長きにわたり精力的にご活動されました。宮崎先生のこれまでのご尽力に深く感謝申し上げます。

## 註

- 1 当館の立ち上げ当初は香雪記念資料館準備室（香雪記念資料館専門委員会）と称し、会場は香雪記念館1階資料室・展示室などと称した。平成14年（2002）の規程制定による設立から実践女子学園香雪記念資料館と称し、平成28年（2016）3月の規程改正により学園附置から大学附置となり同4月より実践女子大学香雪記念資料館と称している。
- 2 借用作品については、宮崎法子監修・中村玲編集「再見！東洋美術一館藏品と東京藝術大学所蔵の中国石仏による」展パンフレット（実践女子大学香雪記念資料館、2019年7月）参照。
- 3 松原三郎「後記」〔『藏品図録』実践女子大学日本・東洋美術展示室、1990年3月）参照。
- 4 実践女子学園創立一二〇年史編纂委員会編集『創立一二〇周年記念 実践女子学園史 一九九一—二〇一八』（実践女子学園、2020年3月）参照。
- 5 松原三郎「贋作考—中国古代仏像の場合—」（『実践女子大美術史学』第4号、1989年3月）参照。
- 6 松原三郎「本学博物館学講座20年のあゆみ」（『MUSEOLOGY』第6号、1987年4月）参照。
- 7 愛甲晴美「調査報告『実践女子学園香雪記念資料館の成り立ちについて』」（『実践女子学園香雪記念資料館館報』第2号、2005年3月）参照。
- 8 前掲註4 『創立一二〇周年記念 実践女子学園史 一九九一—二〇一八』（2020年3月）参照。
- 9 この期の当館の活動に関しては愛甲晴美「香雪記念館1階資料室・展示室展覧会実績報告」（『MUSEOLOGY』第20号、2001年4月）に詳しい。
- 10 中国美術史入門展における展示作業では本学美学美術史学科の専門科目「中国美術史演習」の授業の一環として、担当教員による指導のもと学生に展示作業を行なわせることを例年続けている。学生にとっては、講義で得る知識と共に展示の裏側を体験する実習的な側面を組み合わせた授業となる。複製といえども資料に触れることで、取り扱いの注意や心構えを身に付ける一助ともなる。これは本学美学美術史学科教授・宮崎法子先生が中心となる中国美術史研究室を擁する本学の画期的な取り組みといえる。
- 11 例を挙げると、伝東晋・顧愷之の作と伝わる《女史箴図巻》（原品は大英博物館蔵）に描かれる、鏡を前に髪型を整える宮廷女官の場面を展示する場合は、当館蔵コレクションのうち漢代とされる《方格規矩四神鏡》を展示、併せて仕女の姿を象った漢代の俑（本稿【3. 資料紹介】参照）、あるいは唐代の俑を展示することが多い。
- 12 向井佑介「塑像製作の西と東」（『シルクロード発掘70年 雲岡石窟からガンダーラまで』（京都大学総合博物館2008年秋季企画展図録）臨川書店、2008年10月）参照。
- 13 人を象る俑は、漢代の制作とされる俑を5点、西晋とされる俑を1点、北朝時代とされる俑を2点、隋から唐代とされる俑を3点所蔵する。〔『藏品図録』（実践女子大学日本・東洋美術展示室、1990年3月）参照。〕
- 14 両手を同じ高さ挙げて膝をついて坐る例は、天理大学附属天理参考館蔵《灰陶女子坐俑》（『漢代の銅器・陶器』〔『ひとものこころ：天理大学附属天理参考館所蔵』第1期第1巻、天理教道友社、1986年1月、37頁、図12）、出光美術館蔵《灰陶加彩女子》（『中国の陶俑—漢の加彩と唐三彩—』出光美術館、2009年8月、作品番号5）、東京国立博物館蔵《加彩女子》（『漢・唐時代の陶俑』東京国立博物館、2015年9月、4頁、図2。機関管理番号TG-1952《加彩侍者》）、MIHO MUSEUM蔵《婦人俑》（『中華世界の誕生—新石器時代から漢—』MIHO MUSEUM、2022年7月、101頁、図108）などがある。いずれも制作は前漢時代と推定される。
- 15 前掲註2 「再見！東洋美術」展パンフレット（2019年7月）参照。
- 16 周到ほか「二五六 方相氏画像磚」（『中国美術全集 絵画編18 画像石画像磚』（上海人民美術出版社、1988年4月）参照。
- 17 当館蔵《画像磚》、《孔雀文磚》については多くを次の文献に拠った。宮崎法子「本館所蔵の漢代画像磚について」（『実践女子大学香雪記念資料館館報』第17号、2020年3月）参照。
- 18 前掲註3 松原三郎氏論考（1990年3月）参照。
- 19 前掲註3 松原三郎氏論考（1990年3月）参照。
- 20 当館蔵東洋考古美術コレクションについての主な参考文献は以下の通り（出版年代順）。  
前掲註3・13・18・19 『藏品図録』（1990年3月）  
武笠朗監修「仏教美術展—日本・東洋美術展示室所蔵の作品・複製・拓本による—」解説パンフレット（香雪記念資料館専門委員会・美学美術史学科・博物館学課程、2001年1月）  
小倉絵里子「銅製梵鐘（聖徳大王神鐘）鐘身供養飛天拓本」「天人文拓本」について」（『実践女子学園香雪記念資料館館報』第4号、2007年3月）  
前掲註2・15 「再見！東洋美術」展パンフレット（2019年7月）  
前掲註17 宮崎法子氏論考（2020年3月）

## 図版典拠

- 挿図1 『MUSEOLOGY』第1号（実践女子大学博物館学講座、1982年4月、3頁）より複写。
- 挿図2 『実践女子学園創立90周年記念』（実践女子学園、1989年5月）より複写。
- 挿図3 『MUSEOLOGY』第20号（実践女子大学博物館学課程、2001年4月、2頁）より複写。
- 挿図13 『名品図録：陶磁器』（MOA美術館、1995年10月、63頁）より複写。
- 挿図17 『隋・唐の文物』（『ひとものこころ：天理大学附属天理参考館所蔵』第2期第5巻、天理教道友社、1988年11月、117頁）より複写。
- 挿図18 『隋・唐の文物』（『ひとものこころ：天理大学附属天理参考館所蔵』第2期第5巻、天理教道友社、1988年11月、116頁）より複写。
- 挿図19 『隋・唐の文物』（『ひとものこころ：天理大学附属天理参考館所蔵』第2期第5巻、天理教道友社、1988年11月、24頁）より複写。
- 挿図20 『隋・唐の文物』（『ひとものこころ：天理大学附属天理参考館所蔵』第2期第5巻、天理教道友社、1988年11月、25頁）より複写。
- 挿図22 『中国美術全集 絵画編18 画像石画像磚』（上海人民美術出版社、1988年4月、194頁）より複写。
- 挿図23 『画像磚』（『ひとものこころ：天理大学附属天理参考館所蔵』第1期第3巻、天理教道友社、1986年7月、89頁）より複写。

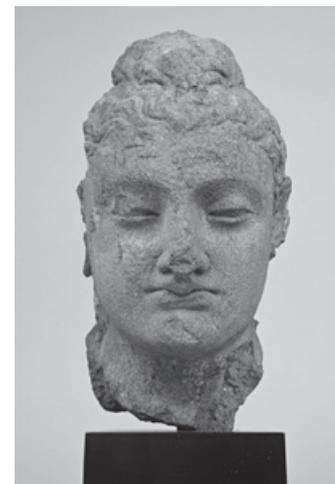
挿図1 博物館学美術資料展示室(一部)  
(渋谷校地)

挿図2 日本・東洋美術展示室(一部)  
(日野校地)

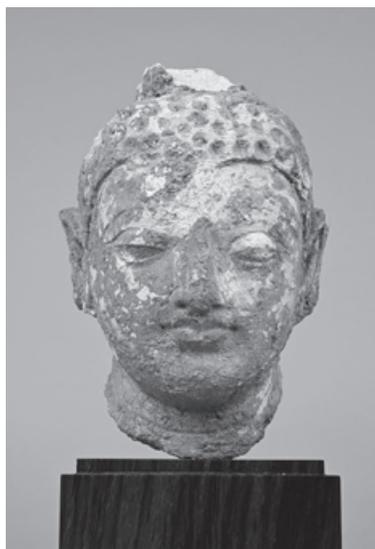
挿図3 「仏教美術展」会場(一部)  
平成12(2000)年度展覧会

挿図4 中国美術史入門展会場(一部)  
令和3(2021)年度展覧会  
「中国美術 初めの一步  
—原寸大複製画と館藏品展—」

挿図5 「再見!東洋美術」展会場(一部)  
令和元(2019)年度展覧会



挿図6 《如来像頭部》その①  
実践女子大学香雪記念資料館蔵



挿図7 《如来像頭部》その②  
実践女子大学香雪記念資料館蔵



挿図8 《如来像頭部》その③  
実践女子大学香雪記念資料館蔵



挿図9 《菩薩像頭部》  
実践女子大学香雪記念資料館蔵



挿図10 《菩薩像頭部》  
実践女子大学香雪記念資料館蔵



挿図11 《東大寺大仏蓮弁線刻画(拓本)》  
実践女子大学香雪記念資料館蔵



挿図12 《加彩女子俑》その①  
実践女子大学香雪記念資料館蔵



挿図13 《加彩女子俑》  
MOA美術館蔵

挿図14 《加彩女子俑》その②  
実践女子大学香雪記念資料館蔵



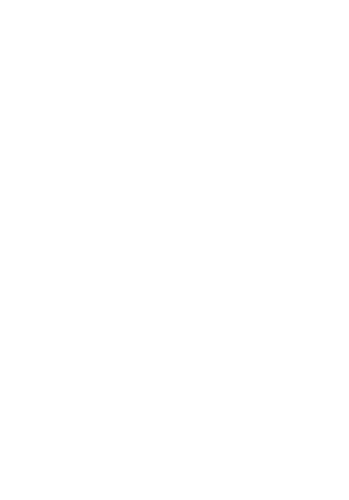
挿図15 《加彩文官俑》  
実践女子大学香雪記念資料館蔵



挿図16 《加彩武人俑》  
実践女子大学香雪記念資料館蔵



挿図17 《黄白釉加彩武人》  
天理大学附属天理参考館蔵



挿図18 《黄白釉加彩武人》  
天理大学附属天理参考館蔵

插图19 《黄白釉加彩武人》  
天理大学附属天理参考館藏

插图20 《黄白釉加彩武人》  
天理大学附属天理参考館藏



插图21 《画像磚》  
实践女子大学香雪記念資料館藏

插图22 《方相氏画像磚》  
河南省鄭州出土

插图23 《押型舖首守門空磚》  
天理大学附属天理参考館藏



插图24 《孔雀文磚》  
实践女子大学香雪記念資料館藏